

福島の畜産 2022



福島県

I 福島県の農業及び畜産の概況

令和3年の本県の農業産出額は、1,913億円で前年より減少しました。本県の畜産業は米に次ぐ主要部門で、その額は農業産出額の24.8%を占める475億円でした。畜産産出額のうち、鶏（170億円）が最も多く、次いで肉用牛（133億円）、乳用牛（88億円）、豚（82億円）の順となっております。畜種別内訳の割合に大きな増減はありませんでした。

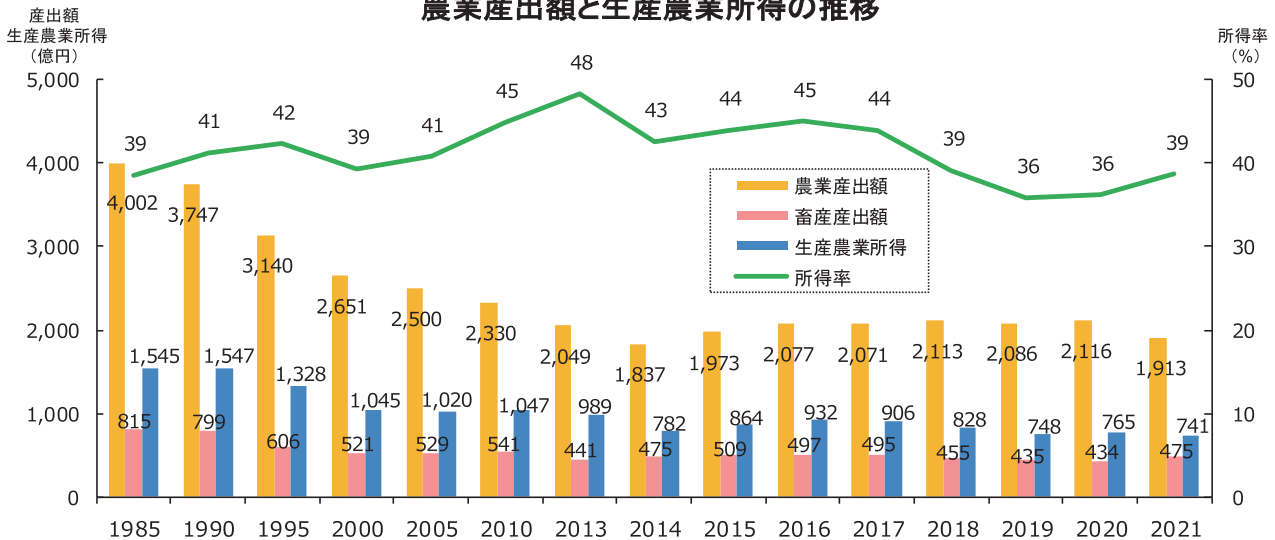
平成23年3月11日に発生した東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から11年が経過しましたが、本県の農林水産業はいまだ深刻な影響を受けております。

畜産業においては、一部地域の原乳及び肉牛の出荷制限、自給飼料及び牧

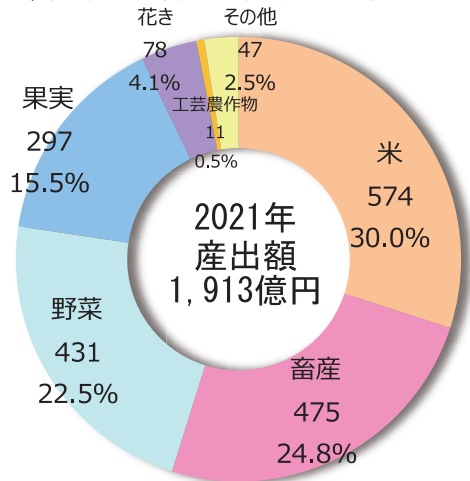
草地等の利用制限、風評被害など、様々な課題を抱えておりますが、一方で営農再開等の復興・再生に向けた歩みを着実に進めているところです。

県としては、県産農林水産物の安全性を積極的にPRし、風評払拭に取り組み、また、畜産業が本県農業の基幹部門であることから、畜産物全般の放射性物質のモニタリング検査並びに肉牛の安全な出荷体制を継続していくとともに、草地・飼料畑等の除染の推進による自給飼料生産基盤の復活、高能力乳用雌牛の整備や優良繁殖雌牛の導入等への支援による生産基盤の再生等の施策を展開し、本県畜産業の力強い復興に向け、全力で取り組んでおります。

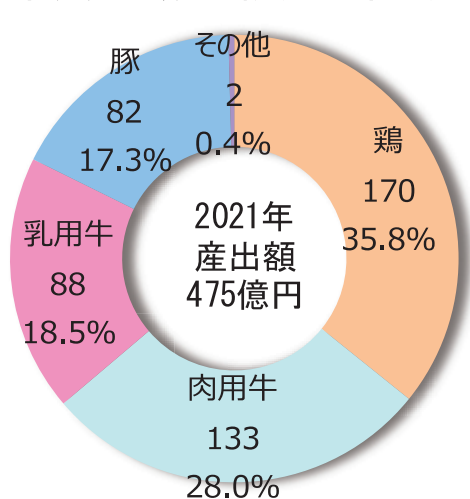
農業産出額と生産農業所得の推移



農業産出額の内訳(単位:億円)



畜産産出額の内訳(単位:億円)



資料: 農林水産省「生産農業所得統計」

家畜飼養頭羽数上位都道府県

<乳用牛>

年次	1位	2位	3位	4位	5位	福島県
1990	北海道	千葉県	岩手県	群馬県	栃木県	13位
1995	北海道	岩手県	千葉県	栃木県	群馬県	13位
2000	北海道	岩手県	栃木県	千葉県	群馬県	13位
2005	北海道	栃木県	岩手県	熊本県	千葉県	14位
2010	北海道	栃木県	岩手県	熊本県	群馬県	13位
2014	北海道	栃木県	岩手県	熊本県	群馬県	18位
2015	北海道	栃木県	熊本県	岩手県	群馬県	18位
2016	北海道	栃木県	岩手県	熊本県	群馬県	18位
2017	北海道	栃木県	岩手県	熊本県	群馬県	18位
2018	北海道	栃木県	熊本県	岩手県	群馬県	18位
2019	北海道	栃木県	熊本県	岩手県	群馬県	19位
2020	北海道	栃木県	熊本県	岩手県	群馬県	18位
2021	北海道	栃木県	熊本県	岩手県	群馬県	18位
2022	北海道	栃木県	熊本県	岩手県	群馬県	20位

<肉用牛>

年次	1位	2位	3位	4位	5位	福島県
1990	北海道	鹿児島県	宮崎県	岩手県	熊本県	8位
1995	北海道	鹿児島県	宮崎県	岩手県	熊本県	7位
2000	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	9位
2005	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	9位
2010	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	10位
2014	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	13位
2015	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	12位
2016	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	12位
2017	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	14位
2018	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	16位
2019	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	15位
2020	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	16位
2021	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	15位
2022	北海道	鹿児島県	宮崎県	熊本県	岩手県	15位

<豚>

年次	1位	2位	3位	4位	5位	福島県
1990	鹿児島県	茨城県	宮崎県	群馬県	北海道	10位
1995	鹿児島県	宮崎県	茨城県	群馬県	北海道	12位
2000	鹿児島県	宮崎県	茨城県	群馬県	北海道	16位
2004	鹿児島県	宮崎県	茨城県	群馬県	千葉県	15位
2011	鹿児島県	宮崎県	千葉県	茨城県	群馬県	18位
2013	鹿児島県	宮崎県	千葉県	群馬県	北海道	20位
2014	鹿児島県	宮崎県	千葉県	北海道	群馬県	20位
2016	鹿児島県	宮崎県	千葉県	群馬県	北海道	20位
2017	鹿児島県	宮崎県	千葉県	北海道	群馬県	20位
2018	鹿児島県	宮崎県	北海道	千葉県	群馬県	20位
2019	鹿児島県	宮崎県	北海道	群馬県	千葉県	20位
2021	鹿児島県	宮崎県	北海道	群馬県	千葉県	20位
2022	鹿児島県	宮崎県	北海道	群馬県	千葉県	21位

<採卵鶏>

年次	1位	2位	3位	4位	5位	福島県
1990	愛知県	鹿児島県	千葉県	茨城県	北海道	21位
1995	鹿児島県	茨城県	愛知県	千葉県	北海道	18位
2000	鹿児島県	千葉県	茨城県	愛知県	北海道	19位
2004	茨城県	鹿児島県	千葉県	愛知県	広島県	17位
2011	茨城県	千葉県	鹿児島県	愛知県	広島県	13位
2014	茨城県	千葉県	鹿児島県	岡山県	愛知県	18位
2016	茨城県	千葉県	鹿児島県	岡山県	愛知県	16位
2017	茨城県	千葉県	鹿児島県	岡山県	広島県	15位
2018	茨城県	千葉県	鹿児島県	岡山県	群馬県	14位
2019	茨城県	千葉県	鹿児島県	岡山県	広島県	19位
2021	茨城県	鹿児島県	千葉県	広島県	岡山県	15位
2022	茨城県	千葉県	鹿児島県	広島県	愛知県	13位

<ブロイラー>

年次	1位	2位	3位	4位	5位	福島県
1990	鹿児島県	宮崎県	岩手県	徳島県	兵庫県	19位
1995	鹿児島県	宮崎県	岩手県	徳島県	兵庫県	24位
2000	鹿児島県	宮崎県	岩手県	徳島県	青森県	23位
2005	鹿児島県	宮崎県	岩手県	青森県	徳島県	19位
2009	鹿児島県	宮崎県	岩手県	青森県	徳島県	21位
2014	宮崎県	鹿児島県	岩手県	青森県	北海道	26位
2016	宮崎県	鹿児島県	岩手県	青森県	北海道	28位
2017	宮崎県	鹿児島県	岩手県	青森県	北海道	25位
2018	宮崎県	鹿児島県	岩手県	青森県	北海道	27位
2019	宮崎県	鹿児島県	岩手県	青森県	北海道	26位
2021	宮崎県	鹿児島県	岩手県	青森県	北海道	25位
2022	鹿児島県	宮崎県	岩手県	青森県	北海道	24位

資料：農林水産省「畜産統計」「食鳥流通統計」各年2月1日現在。
豚、採卵鶏の2005年、2010年、2015年、2020年は農林業センサス実施年のため統計数値なし。ブロイラーの2010年、2015年、2020年は農林業センサス実施年のため統計値なし。ブロイラーの2010年から2012年は統計値なし。

※種鶏飼養羽数を除く

畜種別畜産産出額の推移

(単位：億円)

区分	年次	1995	2000	2005	2010	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
肉用牛		147	119	151	155	111	133	145	140	134	133	118	133
乳用牛		127	126	114	110	91	92	96	96	93	91	89	88
豚		150	96	104	101	97	98	78	79	66	71	85	82
鶏		179	179	155	172	175	183	175	178	158	138	141	170
その他畜産物		3	1	4	3	2	2	3	2	3	2	2	2
畜産合計		606	521	529	541	475	509	497	495	455	435	434	475

資料：農林水産省「生産農業所得統計」

Ⅱ 畜種別の動向

1 酪農

令和4年の乳牛飼養頭数は、対前年比1.7%減の11,600頭となり、酪農家戸数は、対前年比7.1%減の263戸となりました。1戸当たりの飼養頭数は対前年比5.8%増の44.1頭となりました。

令和3年の生乳生産量は、対前年比1.0%増の67,361トンとなりました。

生乳の流通は、東北生乳販売農業協同組合連合会が需給調整を担っており、本県の場合、令和3年度の用途別販売割合は、飲用向け68.0%、加工向け10.3%、その他21.7%となりました。

本県酪農は、東日本大震災の影響から、戸数・頭数が大幅に減少しました。生乳生産量は、平成23年に震災前の約7割まで減少し、平成24年には震災前

の約8割まで回復しましたが、その後減少傾向となり、依然として震災前の約7割にとどまっています。

このため、県では、生産量の回復を図るため、乳用雌牛の導入や中核的な担い手の育成などを推進するとともに、避難・休業を余儀なくされている酪農家の共同経営牧場の整備や経営再開に向けた取り組みを支援しています。

また、生産者団体と連携し、適正飼養管理の指導徹底や県内で生産された原乳のモニタリングを定期的 to 実施することなどにより、県産牛乳・乳製品の安全性と信頼を確保し、風評払拭と消費拡大に努めているところです。

第38回 福島県ホルスタイン共進会 入賞牛



グランドチャンピオン

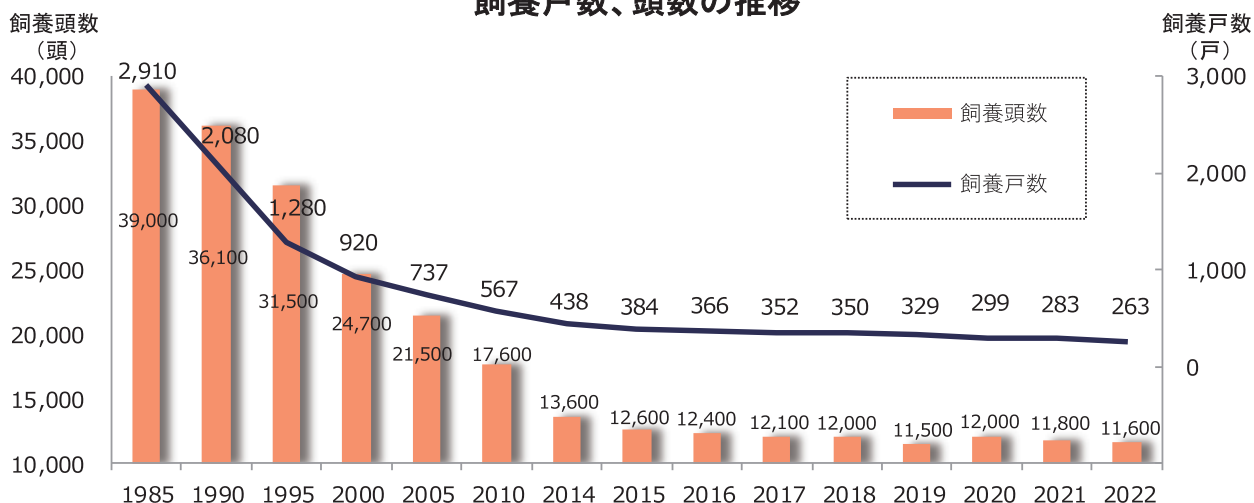
「カシワ プラアトウ バリツシュ アデイダス号」



リザーブチャンピオン

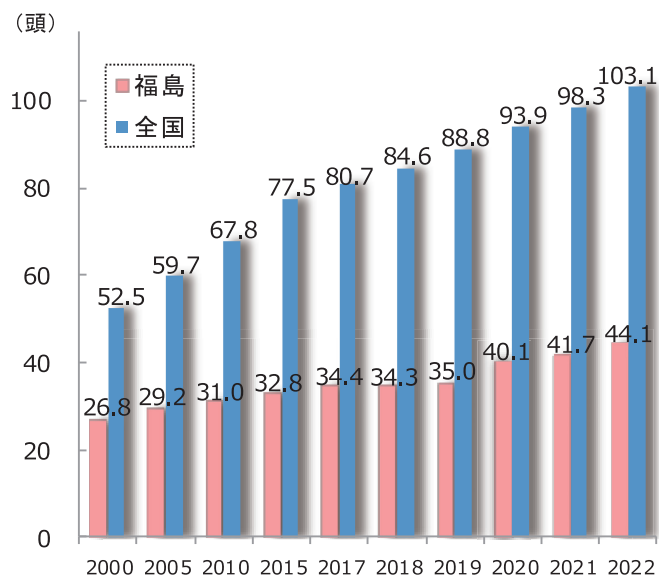
「ヒルトンステージ ダイヤモンドバツク エンドレス号」

飼養戸数、頭数の推移

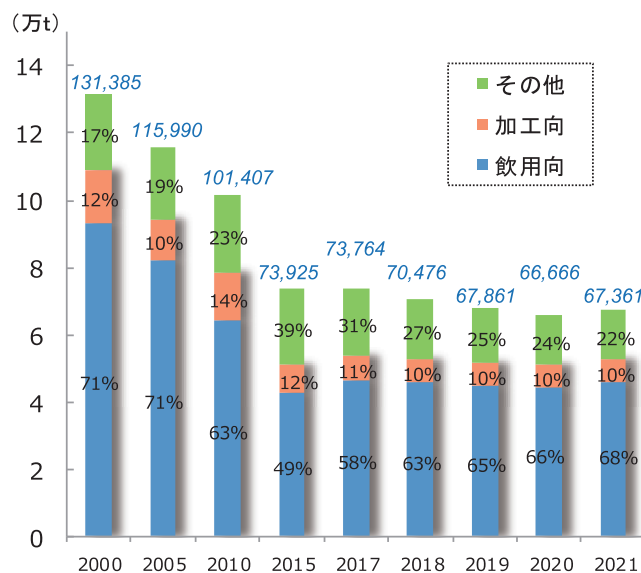


資料: 農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)

1戸当たり飼養頭数の推移



生乳生産量と用途別販売割合の推移



資料: 農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)、「牛乳乳製品統計」



令和4年度「牛乳・乳製品利用料理コンクール」
福島県大会 最優秀賞「アボカドクリームチーズ豆腐」

2 肉用牛

令和4年の本県の肉用牛飼養頭数は49,400頭（対前年比2.2%減）と、全国15位となっております。

飼養戸数は1,650戸で前年に比べて100戸（対前年比5.7%）減少しましたが、1戸当たりの飼養頭数は29.9頭（対前年比3.5%増）でした。

黒毛和種子牛の市場取引頭数は前年と同程度であり、令和4年の本県における取引頭数は9,166頭（対前年比2.0%増）で、1頭当たりの平均価格は683,762円（対前年比9.0%減）でした。

令和4年の肉用牛出荷頭数は17,363頭であり、そのうち61.0%（10,597頭）が黒毛和種となっております。また、肉用牛の出荷先としては43.5%が東京（うち黒毛和種40.8%）となっております。

このような状況下で、本県は肉用牛増頭のため、各種事業により和牛繁殖経営の規模拡大を推進するとともに、経営内及び県内における一貫体制の整備を推進しています。

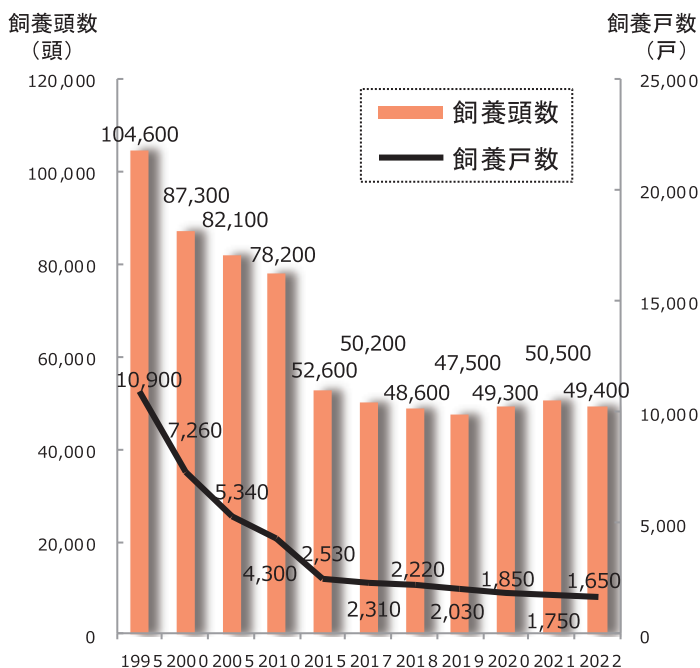
本県では優秀な種雄牛の作出に取り組み、気高系の「勝忠安福」をはじめ、但馬系の「多久実」、糸桜系の「福平晴」といった高能力種雄牛を整備し、県内の和牛改良に活用しています。

また、震災により衰退した本県和牛改良基盤の再生を加速させるため、ゲノミック評価技術の活用による和牛改良を推進し、高能力な雌牛の探索及び種雄牛の造成を図っております。

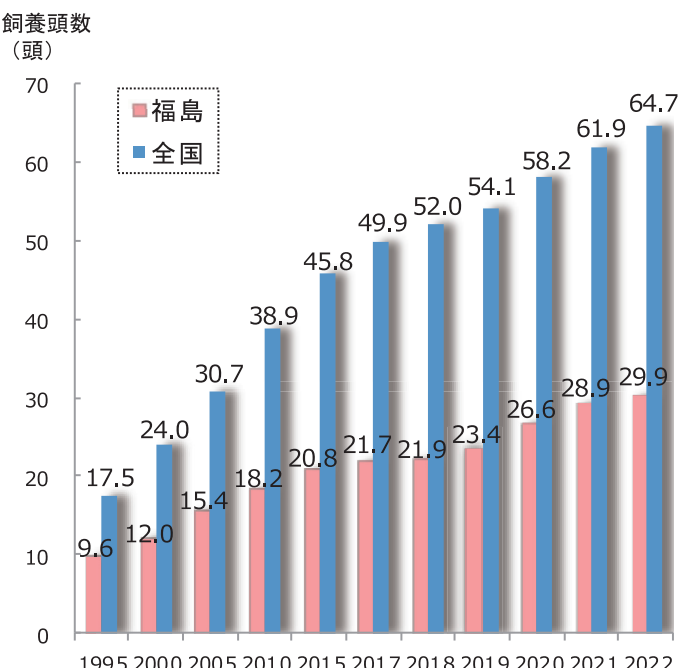
さらにAI（人工知能）を活用した最新の肉質診断技術を活用して高品質な福島牛の生産を支援し、「福島牛」のブランド力向上を図っております。

本県から県内外に出荷される肉牛については、平成23年9月より牛肉の放射性物質検査を実施しているとともに、と畜場への出荷管理や農家に対する定期的な飼養状況確認を行うことで、牛肉の安全性を確保しております。

肉用牛飼養戸数、頭数の推移

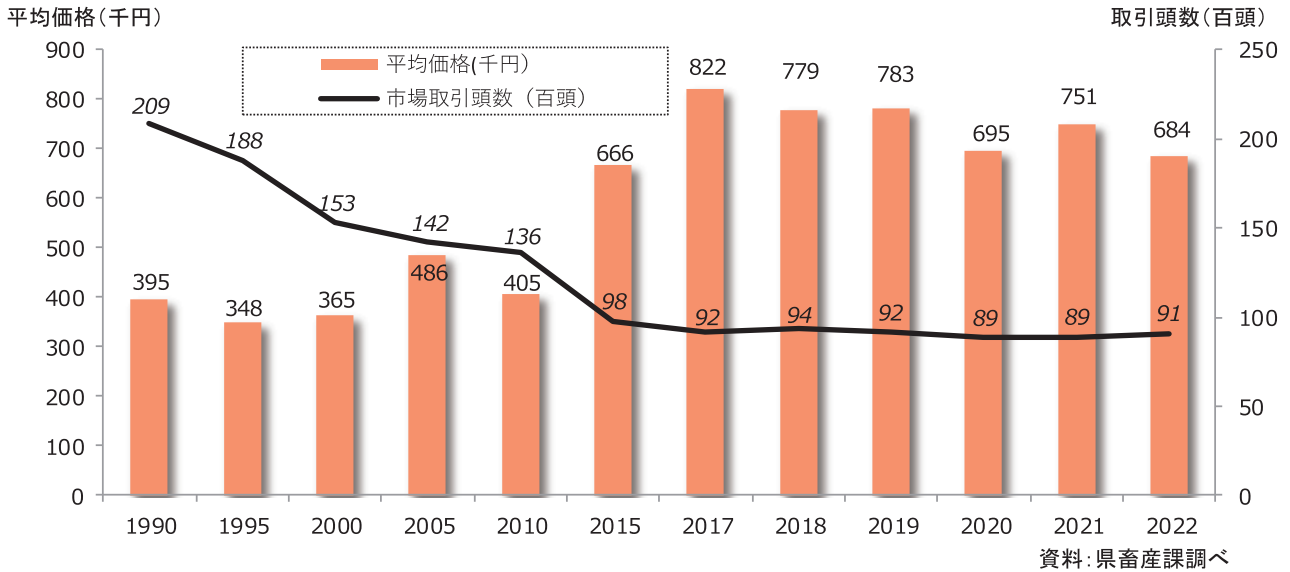


肉用牛1戸当たり飼養頭数の推移

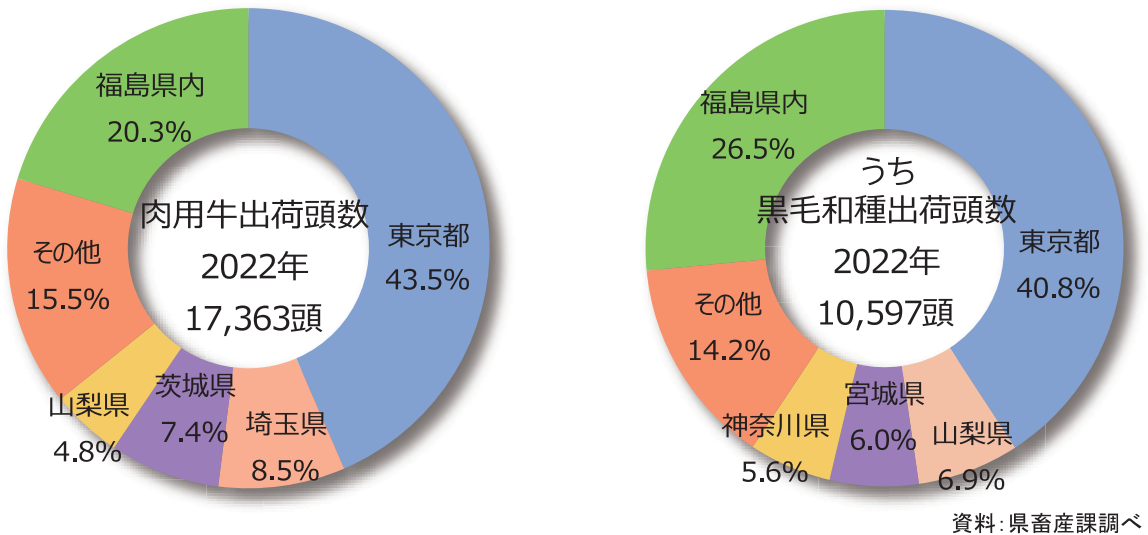


資料：農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)

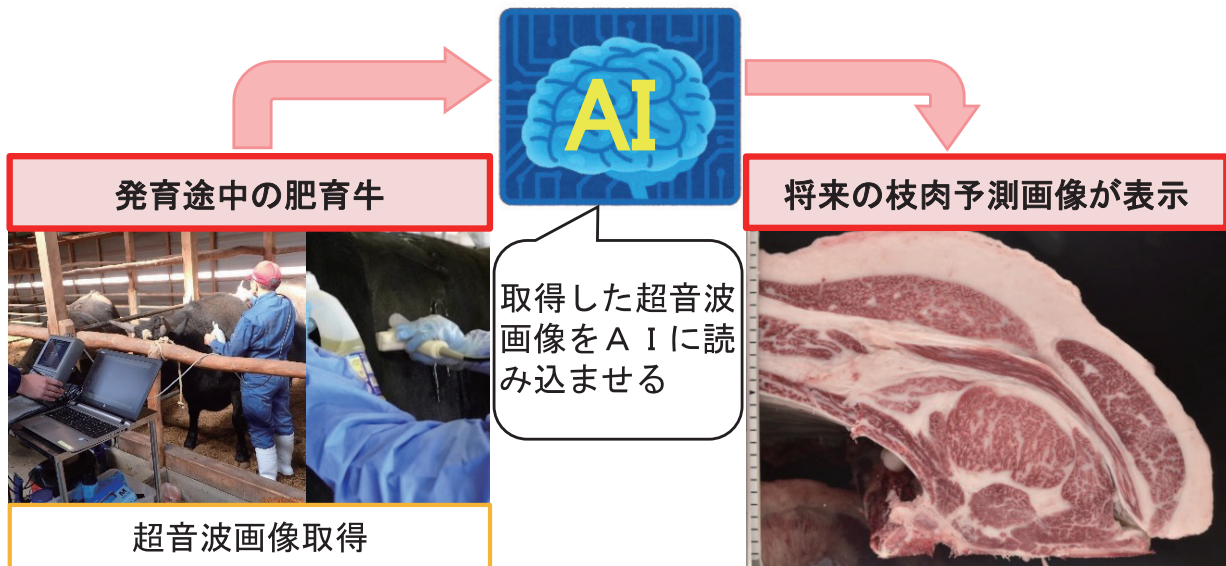
黒毛和種子牛の市場取引頭数及び平均価格の年次推移



肉用牛出荷先別構成比



AIを活用した肉質診断技術



3 養 豚

本県の豚の飼養頭数は、中小規模生産者を中心とした経営中止等により減少傾向が続いておりましたが、法人経営体の新規参入などにより近年は下げ止まりが見え、令和4年では121,600頭（対前年比3.5%減）となりました。

一方、繁殖雌豚頭数は10,400頭（対前年比8.0%減）と減少しています。また、1戸当たりの飼養頭数は大規模経営者の規模拡大等により増加し、2,211頭となっています。

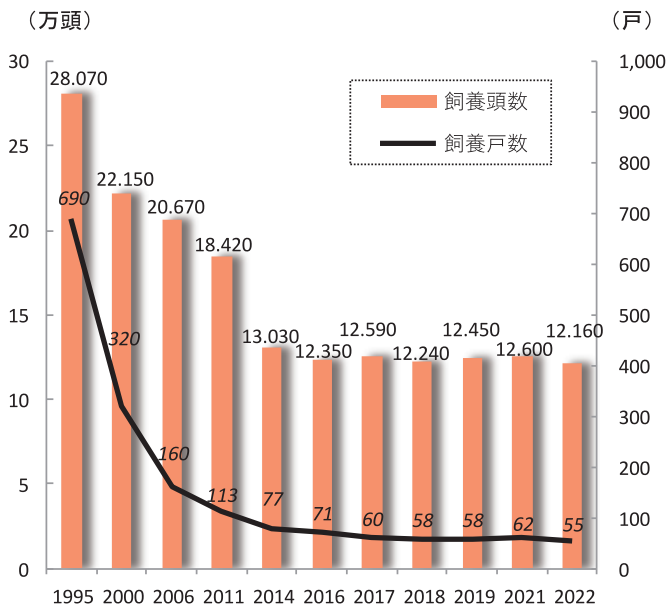
このような状況のもと、県としては生産効率の向上や品質向上のため、平成3年から15年度までの間、肉豚生産の雌系種豚として、ランドレース種系統豚「フクシマL」を供給しており、また、さらに能力の高い雌系種豚を供給するため、平成7年から系統豚造成に着手し、平成15年度には「フクシマL2」を造成し、供給を開始しました。

「フクシマL2」は、福島県のブランド豚「うつくしまエゴマ豚」の生産におけるLW用母豚としても活躍しています。

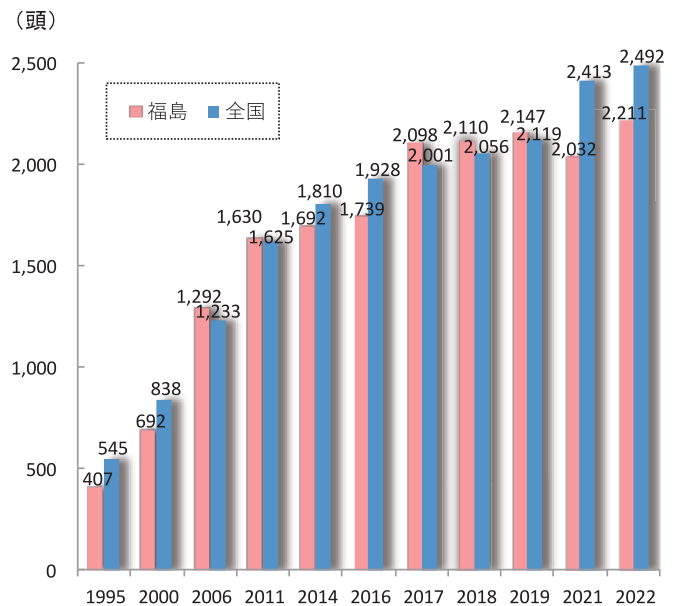
さらに、種豚供給農場の減少や家畜防疫の問題から入手が困難となっていた肉豚生産の雄系種豚として欠かせないデュロック種の安定供給を図るため、平成16年度から種豚群造成に取り組み、産肉能力等に優れる「フクシマD桃太郎」を造成、平成20年度より県内生産者への供給を開始しました。

また、「フクシマL2」・「フクシマD桃太郎」とともに、種豚供給に加え、人工授精用精液の供給により、生産者における種雄豚の維持管理コスト低下のために貢献しています。

飼養戸数、頭数の推移



1戸当たり飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」（各年2月1日現在）
2005、2010、2015、2020年は農林業センサス実施年のため統計数値なし。



「フクシマL2」(雌)



「フクシマD桃太郎」(雄)



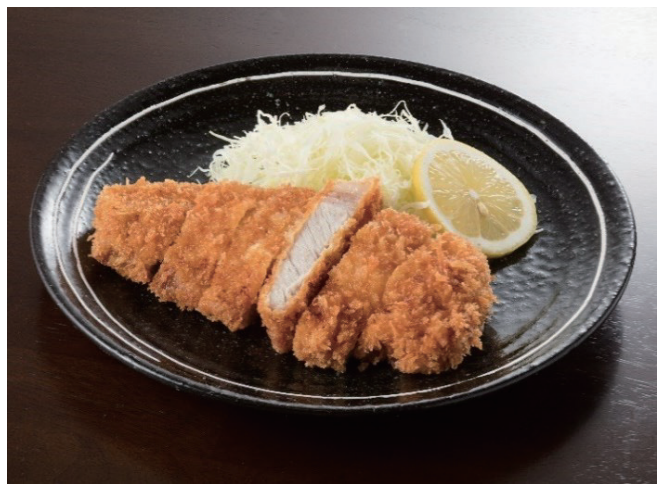
うつくしまエゴマ豚の肥育豚

うつくしまエゴマ豚の特徴

- ・エゴマの種を餌に混ぜて肥育された福島県のブランド豚。
- ・脂質部分に α -リノレン酸を従来の豚肉より約4倍多く含む。
- ・臭みがほとんど無く、やわらかな肉質と甘みのある脂身が楽しめる。



うつくしまエゴマ豚のロース肉、もも肉など



うつくしまエゴマ豚のとんかつ

4 養 鶏

(1) 採卵鶏

本県の採卵鶏飼養羽数は、令和4年に5,882千羽と前年比11.3%増になりました。

1戸当たりの成鶏めす飼養羽数は、92,800羽と全国平均を上回っています。

令和4年の鶏卵生産量は、63,829tで前年に比べて3.6%増となりました。

(2) ブロイラー

令和4年の飼養羽数は、841千羽と前年比1.1%減となり、飼養戸数については35戸となりました。

1戸当たりの飼養羽数は、24.0千羽と減少しております。

令和4年のブロイラー出荷羽数は、332万羽で前年に比べて5.9%減となりました。

(3) 地鶏・銘柄鶏

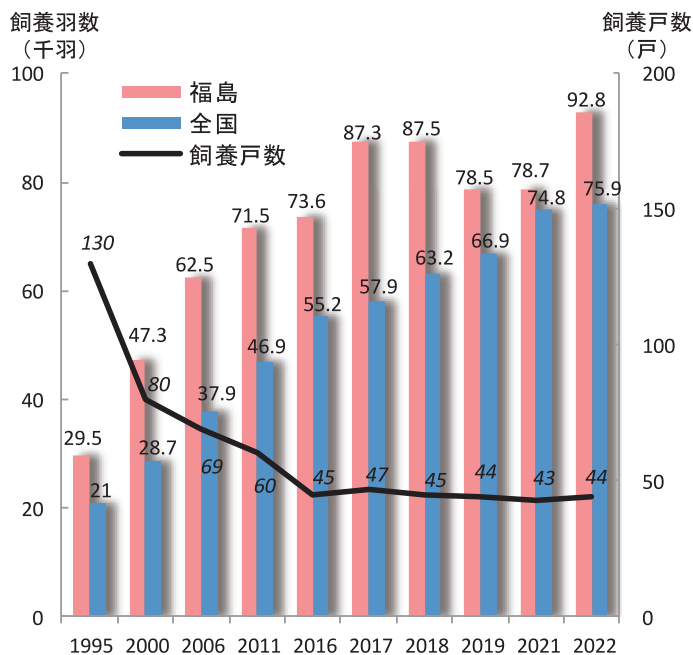
消費者ニーズの多様化により肉質に優れる地鶏や銘柄鶏等の特殊肉鶏の需要が増加しています。

本県では、県で開発した「会津地鶏」、「川俣シャモ」の生産が行われており、令和3年度の出荷羽数は「会津地鶏」約3.5万羽、「川俣シャモ」約4.7万羽となりました。

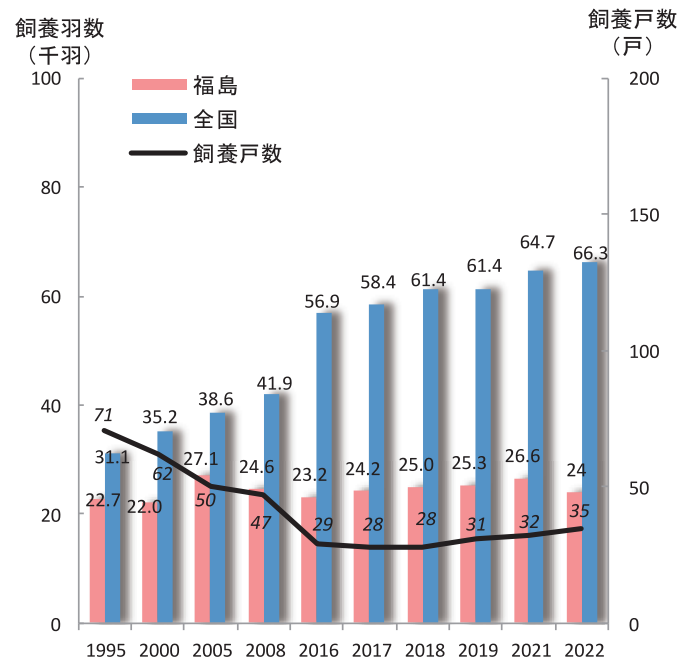
また、平成18年度に「川俣シャモ」、平成19年度に「会津地鶏」の雛生産施設が整備され、民間主導による生産体制へ移行しています。

県では「会津地鶏」、「川俣シャモ」を県ブランド産品として認証し、県内外へ向け広くPRすることで、消費拡大に向け推進しているところです。

飼養戸数・一戸当たり飼養羽数の推移
(採卵鶏)

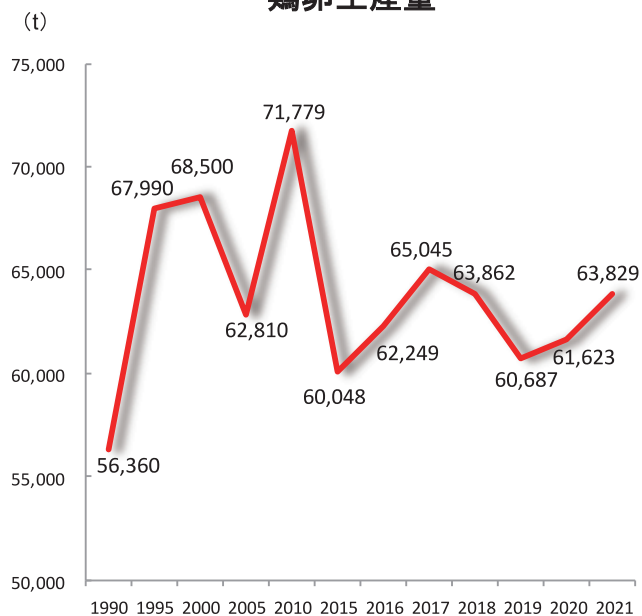


飼養戸数・一戸当たりの飼養羽数推移
(ブロイラー)



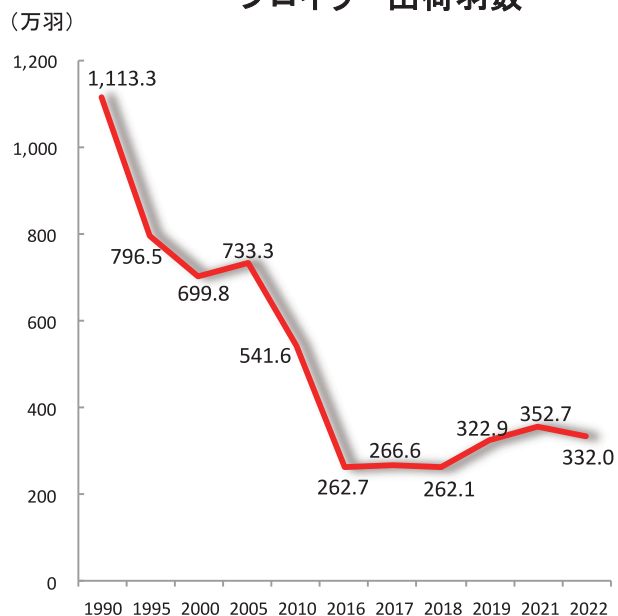
資料：農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)
2005、2010、2015、2020年は農林業センサス実施年のため統計数値なし。

鶏卵生産量



資料：農林水産省「鶏卵流通統計調査」

ブロイラー出荷羽数



資料：2009年以前は農林水産省「食鳥流通統計調査」
2013年以降は農林水産省「畜産統計」(各年2月1日現在)
2015、2020年は農林業センサス実施年のため統計数値なし。



会津地鶏の特徴

- ・ 病気に強く、強健で飼いやすい。
- ・ 適度の歯ごたえがあり、コク、うま味に優れる。
- ・ 羽装に特徴があり、「会津彼岸獅子」の飾羽に古くから使用されている。



川俣シャモの特徴

- ・ 性質は穏やかで飼いやすく、育成率が高い。
- ・ 高タンパク、低カロリーでコク、うま味に優れる。
- ・ 川俣の絹機屋旦那衆のシャモ遊びとして飼われていたシャモを由来として、改良作出した。

Ⅲ 草地飼料

1 飼料作物

本県の飼料作物の令和2年作付面積は14,100ha（平成29年比8.0%減）となりました。そのうち牧草は全体の45.6%、青刈りとうもろこしが11.1%を占めています。

稲ホールクロップサイレージ（稲WCS）と飼料用米の作付は、飼料用米が拡大し、令和3年の作付面積はそれぞれ1,031ha（前年比8.0%増）、10,038ha（前年比103.0%増）でした。

平成30年以降、旧避難指示区域において飼料作物生産が本格的に始まる等、自給飼料生産基盤の復活に向けた新たな動きが進められました。

今後も安心な畜産物を生産するため、牧草地等の除染や吸収抑制対策を推進し、安全な自給飼料の生産を図る必要があります。

2 配合飼料

配合飼料の県内消費量は昭和63年度をピークとして、平成元年以降減少傾向を示していますが、令和3年度は、前年より減少し、330,557tとなっています。

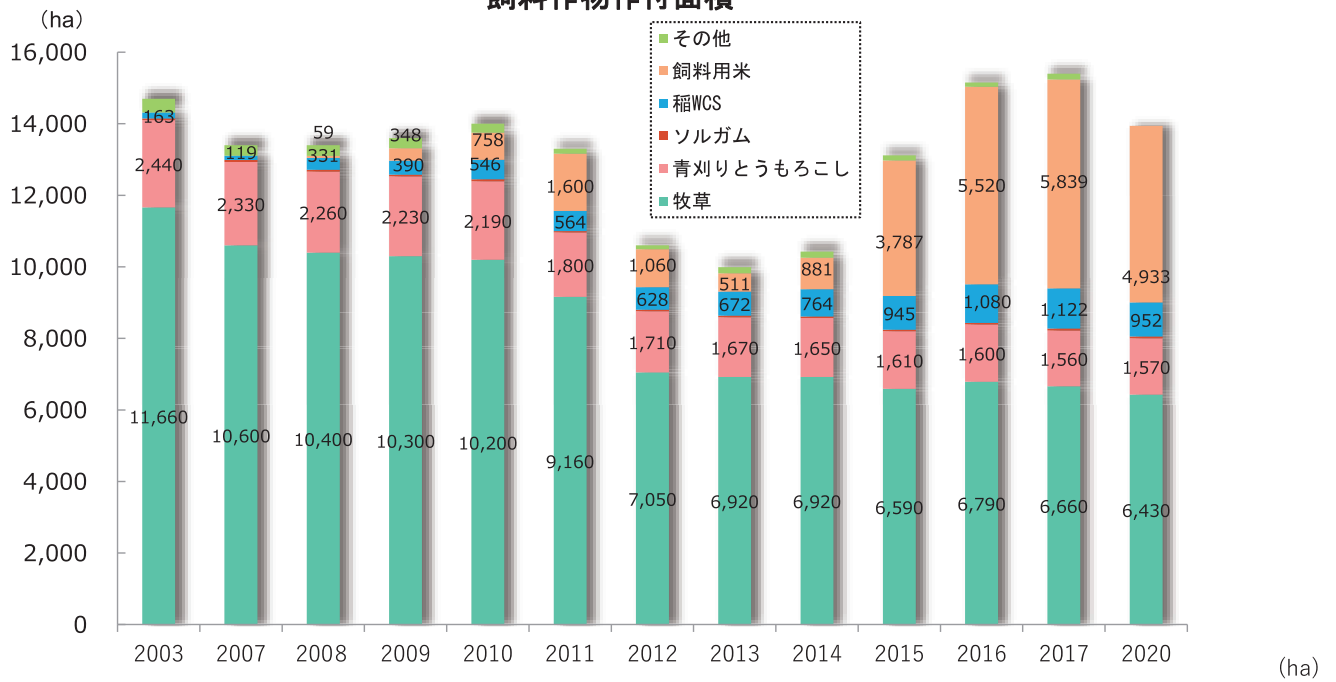
また、配合飼料消費量の構成比は養鶏が43.0%で最も多く、次いで肉用牛26.1%、養豚20.8%となっています。



川俣町山木屋地区の飼料生産



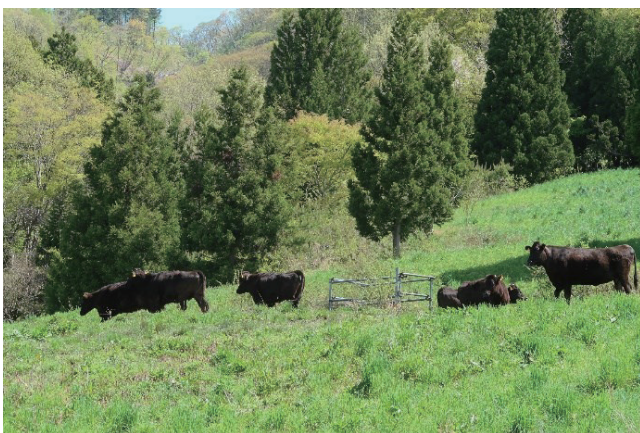
飼料作物作付面積



年	2003	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2020
牧草	11,660	10,600	10,400	10,300	10,200	9,160	7,050	6,920	6,920	6,590	6,790	6,660	6,430
青刈りとうもろこし	2,440	2,330	2,260	2,230	2,190	1,800	1,710	1,670	1,650	1,610	1,600	1,560	1,570
ソルガム	51	57	54	48	57	38	43	46	42	42	44	55	55
稲WCS	163	119	331	390	546	564	628	672	764	945	1,080	1,122	952
飼料用米	-	-	59	348	758	1,600	1,060	511	881	3,787	5,520	5,839	4,933
その他	386	294	296	284	249	138	109	171	170	143	120	164	160
計	14,700	13,400	13,400	13,600	14,000	13,300	10,600	9,990	10,400	13,100	15,200	15,400	14,100

資料：農林水産省「作物統計調査」

2018、2019、2021年は作物統計調査における調査対象ではないためデータなし。
稲WCS、飼料用米は新規需要米認定面積(グラフの数値は牧草、青刈りとうもろこし、稲WCS、飼料用米のみを記載)



扇ヶ峰牧場の放牧再開(喜多方市)



子実用トウモロコシの収穫・調製

IV 家畜衛生



鳥インフルエンザのモニタリング検査



豚熱ワクチンの接種



野生イノシシ用ワクチンの散布

◇国内における疾病発生状況等

1 高病原性鳥インフルエンザ

令和4年10月以降、令和5年1月末までに25道県で70事例の発生が確認されています。

県では、国の「高病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」に基づくモニタリングや報告徴求等の監視体制を強化し、併せて県内の家きん飼養農場への立入調査、飼養衛生管理指導を実施し、本病の発生防止を図るとともに、万が一の発生に備え、各地方で防疫演習を開催し、防疫体制の強化を図っています。

2 豚熱

平成30年9月に岐阜県において、国内では26年ぶりとなる豚熱が発生し、令和5年1月末までに18都県で85事例の発生が確認されています。

県では、令和2年9月から国の「豚熱に関する特定家畜伝染病防疫指針」に基づき県内すべての養豚農場を対象に豚熱のワクチン接種を実施しています。

併せて、継続的な立入調査を行い、飼養衛生管理指導を実施することで、本病の発生防止を図っています。

また、野生イノシシの豚熱検査の実施による浸潤状況の確認や野生イノシシ用のワクチンを散布し豚熱のまん延防止を図っています。

3 口蹄疫

平成22年4月20日に、宮崎県において口蹄疫の発生が確認され、感染が疑われる牛や豚等の家畜の処分、感染拡大を抑えるためのワクチン接種等の防疫措置（約29万頭の処分）を実施し、同年9月に清浄性を確認しました。

その後、平成23年2月5日（日本時間）に国際獣疫事務局（OIE）により「ワクチン非接種口蹄疫清浄国」として認定されました。

現在、我が国では発生国からの畜産物等の輸入禁止等、厳重な検疫を実施し侵入防止を図っています。

4 牛海綿状脳症（BSE）

平成13年の初発例以来、平成21年2月までに36例が確認されています。

平成25年5月の国際獣疫事務局（OIE）総会において、我が国は、サーベイランス、飼料規制及びと畜場での対策等のBSEに対するリスク管理についての国際的評価を得て、「無視できるリスク」の国に認定されました。

5 ヨーネ病（牛）

全国で、令和2年は809頭、令和3年は957頭の発生・摘発がありました。定期検査や導入時の検査の徹底等により、その撲滅を図ることとしています。

また、本県では平成26年度より検査対象をこれまでの乳牛に加え、肉用牛に拡大しております。

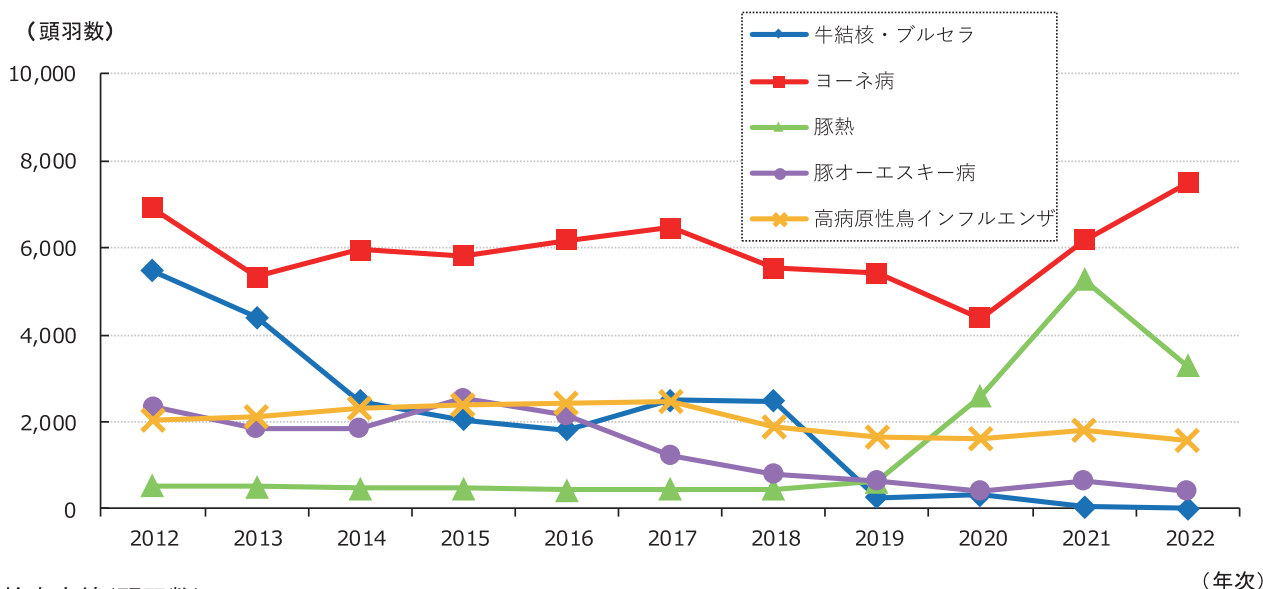
◇県内における疾病発生状況及び対応

令和4年の家畜伝染病については、高病原性鳥インフルエンザが本県で初めて確認されましたが、発生した2事例とも迅速な防疫作業を行いまん延を防ぎました（2事例 約11.7万羽殺処分）。その他、牛のヨーネ病が1戸8頭、みつばちのふそ病が4戸6群発生しました。

また、届出伝染病は、牛伝染性リンパ腫2戸34頭、サルモネラ症（牛）1戸4頭、豚丹毒1戸5頭、鶏のロイコチトゾーン症3戸61羽などが発生しました。

現在、畜産業は、海外との家畜、飼料及び人の交流が盛んであるため、各種伝染病の発生予防・予察のための検査や予防接種の指導など防疫対策の徹底を図り、関係者との連携を強化し、疾病発生の未然防止、早期発見、迅速な対応に努めているところです。

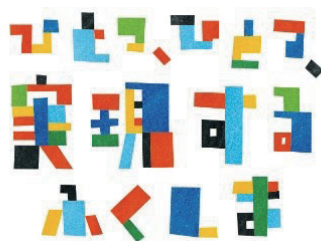
県内の家畜防疫（検査）実施状況（年次）



資料：県畜産課調べ



第12回全国和牛能力共進会
第1区 福島県代表牛「福匠勝」
(2021年3月29日出生 撮影時1ヵ月齢)



福島県農林水産部畜産課

TEL 024-521-7366

FAX 024-521-7939

〒960-8670 福島県福島市杉妻町 2-16